

邦 樂 演 奏 会

| 邦 樂 名 曲 選 |

第十四回
'80都民芸術フェスティバル

邦 樂

演

奏

会

昭和五十五年三月九日(日)

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

第一生命ホール

後援 東京都

(五十音順)

主催 邦楽連合会
社団法人 義太夫協会
清古元協会
財団法人 清古元協会
新常磐津協会
社団法人 長唄協会
社団法人 日本三曲協会
内協会
品川区旗の台六の二十七の二
中央区銀座八の十四の三
港区南青山一の十七の十三の一〇三
電話(五四二)五四七一一番
電話(五四二)〇二四〇番
一六番
新常磐津協会
品川区旗の台六の二十七の二
中央区銀座六の十二の二の四〇二
電話(五七二)八七五六番
港区南麻布五の三の四十六
電話(四四四)三〇二〇番
新常磐津協会
品川区旗の台六の二十七の二
中央区銀座六の十二の二の四〇二
電話(五七二)八七五六番
港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番
新常磐津協会
品川区旗の台六の二十七の二
中央区銀座八の十四の三
港区南青山一の十七の十三の一〇三
電話(五四二)五四七一一番
電話(五四二)〇二四〇番
一六番

'80都民芸術フェスティバル参加公演(昭和54年度東京都助成公演)

種目	公演内容	会場	期日	問合せ先
オペラ	ヴェルディ「椿姫」	東京文化会館	2月6日・7日	(414)5265 長門美保歌劇団
	モーツアルト「フィガロの結婚」		2月15日・16日・17日	(370)6441 二期会
	ビゼー「真珠採り」		3月1日・2日・3日	(371)5384 藤原歌劇団
	間宮芳生「昔漁人買太郎兵衛」 清水脩「炭焼姫」	モーツアルト・サロン(新宿)	3月6日～15日	(404)4532 東京室内歌劇場
オーケストラ唱	新日本フィル、日フィル、東響、都響、東フィル、 新星日響・日本プロ合唱団連合、東京アカデミカーランサンブル、読響	東京文化会館	1月15日～3月4日	(437)6837 日本演奏連盟
邦楽	第10回 邦楽演奏会	第一生命ホール	3月9日	(571)0216 邦楽連合会
新劇	E・シュヴァルツ作 「シュヴァルツの裸の王様」	読売ホール 他	2月16日～2月27日	(352)6922 青年劇場
児童劇	〈影絵人形劇〉「りゅうとびわ」「こぶたのマーチ」「つのぶえのうた」	葛飾公会堂 他	2月2日～2月19日	(994)7624 劇団角笛
	〈舞台劇〉 小沢正 作「ちゅううたのくうそう」	朝日生命ホール	2月15日～2月24日	(920)5232 東京演劇アンサンブル
	〈人形劇〉 川尻泰司 作「金の鍵」	日経ホール 他	2月14日～3月31日	(370)3371 人形劇団ブーク
バレエ	ミンクス「ドン・キホーテ」*	立川市民会館 東京文化会館	3月23日 3月29日・30日	(462)5524 日本バレエ協会
	グラン・パ・ド・ドウ集 ローベンスヨルド「ラ・シルフィード」	東京文化会館	3月18日・20日	(723)2356 東京バレエ協議会
現代舞踊	「ラ・カンパーナ」「挑戦」「スサノオ」*	東京文化会館	3月6日・7日	(400)4544 現代舞踊協会
日本舞踊	第23回 日本舞踊協会公演 *	国立劇場	2月19日・20日・21日	(533)6455 日本舞踊協会
能	都民能 *	東京文化会館	2月2日	(574)6441 能楽協会
	翁付式能	宝生能楽堂	2月17日	
民俗芸能	第11回 東京都民俗芸能大会(全席無料)	竹の塚社会教育館 多摩市公民館	3月1日 3月2日	(212)5111(内)44-531 東京都教育局 社会教育部文化課
都民寄席	第10回 都民寄席(全席無料)	田無市民会館他	2月14日～2月22日	

*は無料招待有

全体についてのお問合せは東京都教育局社会教育部文化課
TEL.(212)5111 内線44-531へ

'80都民芸術フェスティバル公演によせて

東京都知事 鈴木俊一



都民芸術フェスティバルは、昭和四十三年度に発足以来、本年度で十二回目を迎えることとなりました。

このフェスティバルは、都が芸術文化団体の行う公演に対してその費用の一部を補助し、優れた芸術を、安い料金で、多くの都民の方々に鑑賞していただくことを願って、毎年、冬から春にかけて開催してまいりました。今では、公演の種目も当初の六種目から十一種目まで拡大され、公演内容の充実とあいまって、都の芸術の祭典として、すっかり都民の間に定着した催しになりました。

近年、私たちの生活水準は大きく向上し、物質的にはとても豊かになりましたが、反面ともすると心の豊かさを見失なつてしまいそうな状況にあると思います。

こうした中につけて、都民の皆さんにこのフェスティバルの優れた舞台を大いに楽しんでいただき、日々の生活に憩いとうるおいをもたらすことができれば幸いです。このフェスティバルの公演に参加し、その一翼を担ってくださった「邦楽演奏会」の力一杯の活躍を期待しております。

第一部 番組（十二時半開演）

一、河東助六由縁江戸桜（助六）

← 淨瑠璃 →

山山山山山山山山山山山山山
彦彦彦彦彦彦彦彦彦彦彦彦
由琴七京みちか子節緩ひな祐智恵音
記保京さか子子子子子子子子子子
子美子湖子子子子子子子子子子

同上
調子

山山山山山山山山山山山山
彦彦彦彦彦彦彦彦彦彦彦
千百幸さ順莊河貞美絃せさ
々々々々々々々々々々々々々々々々
子子子子子子子子良子音子子子

二、箏曲冬の曲

箏本手
社植矢
本村木
久佳代子
二

三、新内梅雨衣醉月情話（花井お梅）
——大川端の段——

大川端の段

淨瑠璃 富士松 長門太夫
同 鶴 賀 梅寿太夫

四、常磐津釣

女

同淨瑠璃
常磐津
常磐津
常磐津
光勢太夫

三味線 常磐津
常磐津 菊寿郎
常磐津 菊雄
上調子 啓壽郎

箏替手 橫川斎 田原藤 延直喜 子子野

三味線
上調子 富士松
新内 菊三郎
勝史郎

五、義太夫 天網島時雨炬燈

|紙屋内の段|

治兵衛 竹本
おさん 竹本
綾之助 土佐廣

三味線 豊澤仙廣

六、清元北州千歳寿(北州)

淨瑠璃 清元
同清元元登志寿太夫
清元元政宗太夫
元成美太夫

三味線 同上調子
清元元吉志郎
元梅吉

七、長唄教草吉原雀(吉原雀)

同同同唄
杵杵杵杵杵
屋屋屋屋屋
佐佐佐佐佐
吉与志登代
紅臣奈

囃子

同同同同三味線
小笛鼓
望望望福
月月月原
初初初道
太初初壽
穗紫能那
津也能真津能

八、箏曲岡康砧

岡安小三郎作曲

箏替手 中能島慶子
木島村 千華能子
美弥能子

箏本手

三絃羽山田原孝慶能井
鈴江橋木花本田内
百合能穗紫能那
真津能穗紫能那
津也能真津能那

大鼓

同

小鼓

同

笛

鼓

同

同

同

三味線

望望望福

月月月原

初初初道

太初初壽

穗紫能那

杵今今今今

屋藤藤藤藤

佐郁小文綾

浪子苗子子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

<p

第二部 番組（四時半開演）

一、箏曲竹 生 島

唄

佐堀瀬伊
藤内尾
伊与恵
伊千穂
伊清香

箏

三絃
六小前山
角島田根
伊秀史
伊初崇

二、宮菌鳥 辺 山

同淨瑠璃
宮宮宮
菌菌菌
千祐佳
千有紀

三味線

宮菌千愛
歌

・

三、義太夫伽羅先代萩

—政岡忠義の段—

政岡
宗御前
八汐竹
竹本本
素素朝春
丸八重華

三味線
鶴澤津賀昇

四、新内明鳥夢泡雪（明がらす）

—雪責の段—

同淨瑠璃
花富士松
園加賀
一声

三味線
上調子

新新
内内

勝史郎
勝一朗

五、常磐津 乗合船 恵方万歳（乗合）

同 同 同 同 咲	進	同 同 同 同 淨 瑞 璃	同 同 同 同 常 磐 津	同 同 同 同 常 磐 津
芳 芳 芳 芳 鳥 羽 芳		清 清 清 清 清	川 青 山 口	常 磐 津
村 村 村 村 屋 村	帳	元 元 元 元 元	瀨 木	常 磐 津
伊 伊 里 五		佳 志 志 志 清 美 寿 太	順 鈴 五	小 文 字 太 夫
知 司 朗 藏 祿 長 治		崇 貴 太 太 太 夫	輔 慕 郎	八 重 太 夫
囉 子		太 夫 夫 夫 夫		一 三 太 夫
大 鞍	同 同 同 小 笛	上 調 子	同 同 三 味 線	同 上 調 子 三 味 線
	鼓		三 味 線	
仙 梅 梅 梅 梅 福	杵 杵 杵 杵 杵			
波 屋 屋 屋 屋 原	屋 屋 屋 屋 屋	清 清 清 清		常 磐 津
佐 勝 栄 右 金 百	榮 榮 榮 榮 榮	元 元 元 元		常 磐 津
太 六 一 太 之	三 津 三 美 正 次	國 寿 國 荣		八 文 字 兵 衛
次 郎 郎 近 郎 助	郎 郎 郎 治 次 郎	太 三 次		百 八
		郎 郎 郎 三		二 八

六、尺 八 鹿 の 遠 音

尺 八	山 口
川 青 山 口	
瀨 木	
順 鈴 五	
輔 慕 郎	

七、清 元 メ 能 色 相 図（神田祭）

同 同 同 同 淨 瑞 璃	上 調 子	同 同 三 味 線
清 清 清 清 清		三 味 線
元 元 元 元 元	上 調 子	
佳 志 志 志 清 美 寿 太		
崇 貴 太 太 太 夫		
太 夫 夫 夫 夫		
囉 子		
大 鞍	同 同 同 小 笛	
	鼓	
仙 梅 梅 梅 梅 福	杵 杵 杵 杵 杵	
波 屋 屋 屋 屋 原	屋 屋 屋 屋 屋	清 清 清 清
佐 勝 栄 右 金 百	榮 榮 榮 榮 榮	元 元 元 元
太 六 一 太 之	三 津 三 美 正 次	國 寿 國 荟
次 郎 郎 近 郎 助	郎 郎 郎 治 次 郎	太 三 次
		郎 郎 郎 三

八、長 営 勸

同 同 同 同 咲	進	同 同 同 同 淨 瑞 璃	同 同 同 同 常 磐 津	同 同 同 同 常 磐 津
芳 芳 芳 芳 鳥 羽 芳		清 清 清 清 清	川 青 山 口	常 磐 津
村 村 村 村 屋 村	帳	元 元 元 元 元	瀨 木	常 磐 津
伊 伊 里 五		佳 志 志 志 清 美 寿 太	順 鈴 五	小 文 字 太 夫
知 司 朗 藏 祿 長 治		崇 貴 太 太 太 夫	輔 慕 郎	八 重 太 夫
囉 子		太 夫 夫 夫 夫		一 三 太 夫
大 鞍	同 同 同 小 笛	上 調 子	同 同 三 味 線	同 上 調 子 三 味 線
	鼓		三 味 線	
仙 梅 梅 梅 梅 福	杵 杵 杵 杵 杵			
波 屋 屋 屋 屋 原	屋 屋 屋 屋 屋	清 清 清 清		常 磐 津
佐 勝 栄 右 金 百	榮 榮 榮 榮 榮	元 元 元 元		常 磐 津
太 六 一 太 之	三 津 三 美 正 次	國 寿 國 荟		八 文 字 兵 衛
次 郎 郎 近 郎 助	郎 郎 郎 治 次 郎	太 三 次		百 八
		郎 郎 郎 三		二 八

歌詞と解説（演奏順）

(解説 竹内道敬)

第一
部

一、河東節 助六由縁江戸桜（助六）

東節 助六由縁江戸桜(助六)
すけろく ゆかりのえ とさくら

今日演奏される助六は、その江戸節の中でも、とくに代表作といわれる作品。歌舞伎十八番の「助六」の芝居で、助六が登場してくる場面で使われる。歌舞伎の「助六」ではじめてこの河東節が使われたのは、宝暦十一年（一七六一）のこととで、天保三年（一八三二）に歌舞伎十八番の内と銘うたられてからは、市川家の助六に限つて、この河東節が語られるところになった。

助六実は曾我五郎が、友切丸詮義のために廓に入り、意休を切つて刀を取り戻すという簡単なストーリーだが、豪華けんらんたる舞台装置とあでやかな衣裳のとり合せ、そして江戸っ子の代表助六の大躍躍で、観客を魅了してきた。

「古今和歌集」からとつて組み合せて、すべて作られたもので、歌詞は千鳥の曲の後唄を除いて、すべて曲は唄も箏も単純・素朴さを目的とし、箏の調絃も古今調子を用いて、箏の高雅さをねらっています。古今組の曲には現在筝だけの長い合の手——手事があります。が、千鳥の曲以外の手事は、のちに明治になつて、京都の松阪春栄という人が作曲して入れたもので、派手な旋律で技巧の勝つたものになつています。

この冬の曲も、歌は「古今和歌集」の冬の部からとつたもので、第一歌は読人知らず、第二歌は紀秋岑、第三歌は王生忠岑、第四歌は春道列樹の歌、そして前弾は雅楽にヒントを得たものといわれています。

二、筝曲冬の曲

曲冬の曲 きよく

この事件は當時大評判となり、東京絵入新聞は「花井於梅『醉月奇聞』」という続き物を連載した。その記事の一節をアレンジして新内化したのがこの曲で、「向うへちらちら小提灯」など、原文のままのところがずいぶんある。

「うきふし繁き……」のお梅のクドキがいいところで、「向うへちらちら小提灯」からほろ酔いの峰吉のせりふに、新内流しの手があしらいになり、雰囲気をかもし出す。上調子が小バチを使って高音をきかせるのも一つの特色。殺しの場面へと盛り上げる作曲の巧みさはさすがである。

なお、時間の都合で、前半とお梅のクドキのあとを省略いたします。

三、新内梅雨衣醉月情話

—大川端の段—

その助六が舞台に登場してくるとき、伴奏として正面の御簾内で語られる淨瑠璃がこの「助六」で、華やかな気分を盛り上げる大切な淨瑠璃となつてゐる。

提灯消えて真の闇、お梅は声かけ
梅へおは、峰どん、峰どん。へと

峰へあ、あ人殺し、人殺し、人殺しだ。
へという声は、川にひびいて物凄く、よ

へという声は、川にひびいて物凄く、また降り出だす大雨に、うちまじりたるはたがみ、あ、あ、人殺し、人殺しだと峰吉が、苦痛ながらも逃げ回る、へ日頃の懲り知れと、恨みは深き川端に、浮名を流す醉月情話、そのあらましを富士松の、節に合せて書き残す。

四、常磐津釣り女おんな

お帰りなんですねえ。
梅へあい、どこから帰ろうとも、私の家へ私が帰るんだから、そんな詮
索はいらぬよ、また何時に帰ろうとも私の自由、だがね、家で話ので
きない事があるんだから、それでここに待つていたのさ。へと聞いて峰
吉 まじめ顔

「梅のものかいな。へと、しなだれかかるを突放し、
梅へおい峰どん、お前はまあ、あんまりな人だねえ。
へといわれてもじもじ頭をかき
梅へもし姐さん、何で私があんまりなんですえ。
梅へあれさ、大きな声をするには及ばないよ、白ばつくれてもみんな知
つてゐるよ。

峰へ何の事だか知らねえが、知つているはどういう訳を。
梅へさ、訳はお前の胸にある。女と思いあなどつて、あることないこと

親たちへ、吹き込む故に家のもの、私の留守を辛いに、親をだましてあるの家を、乗つ取つた上私まで、なぐさむ心であろうがな、ええ恩知らず人でなし。

へと、はつたと睨むその有様、角目立つたる形相に、峰吉も氣味悪く、峰へもうし姐さん、そんな難題をいわれちやあ、この峰吉が迷惑だ、恨みがあるなら家でゆつくり聞きましょう。

へ夜更けさふけに往来で、どうする気だと突きとばせば、

へどうするものかこうすると、武者ぶりつくを振り払い、もうこれまでと峰吉が拳掴んで振り上ぐれば、こなたもすかさず立ち上り、かねて隠せし光り物、取るより早く背打ちの手もと狂うて思わずも、脇腹ぐつと差し通せば、不意の深手に、

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部作曲。明治十六年十二月に発表されました。のち明治三十四年「戯詣恋釣針（えびすもうでこいのつりばり）」という題で舞踊劇として上演されてから、とくに知られ、流行するようになりました。

狂言の「釣針」の趣向をそのままかりたもので、おおらかさと滑稽さの対比が見事にあらわされております。太郎冠者が醜女を釣り上げるところが、とくに面白くなつております。

「そもそもこれは猿樂の、昔よりしてその技の、おかしといし狂言師名に大蔵や鷺流の、姿をうつす釣女。大名へかように候者は、この所の大名にござる、ヤイヤイ太郎冠者あるか。太郎へハア、おん前に。大名へいたか。太郎へハア。大名へ汝も知る如く、この年まで定まる妻がない。うけたまわれば、西の宮の恵比須三郎殿は、福者と申すこと、これへ参り、妻を申しうけようと存ずる。汝供をせい。太郎へまことに仰せの如くでござる。西の宮の木びす三郎殿へ参るがようございましょう。私も定まる妻がございません。ついでながら申しうけましょう。大名へきてさて、己れは卒爾な事をいうものじや。ゑびす三郎殿とこそうえ、きびす三郎と申す事があるものではない。太郎へハテ、絵にかいだ折はゑびす三郎と申し、木で作つた折は、木びす三郎と申しまする。

大名へなかなか汝は物知りでおりやる。それがしは道不案内じやほどに名所旧跡を語りきかせよ。太郎へ畏まつてござる。大名へして、向うに見える山は何山じや。太郎へハア、あれは山でござる。大名へここは夏山葉山じやが、何と申す。太郎へエエ何山は山でござる。オオそれへあんの山からこんの山へ、飛んで出たるは何者ぞ。頭にふつ、ふと二つ細うて、長うてりんとはねたを、ちやつと推した。謡へ兎じや。大名へ何を申す。して西の宮はまだか。太郎へもはやこの森の中でござりまする。大名へさらば參詣をいたそうず／＼。太郎へハア。大名へまづ鰐口にとりつこう。じやがん／＼。いかに申し上げ候。われ今年まで無妻なり。大名へ三郎殿の利益にて、定まる妻を授け給え。へ授け給えと、一心こめて伏し拝む。大名へヤイ太郎冠者、汝も拝め。太郎へ畏つてござる。じやがん／＼。いかに木比須三郎殿へ申し候。へわれも定まる妻はなし。似合相応美しき、妻をお授け／＼と、三拝九拝したりける。大名へヤイ太郎冠者、今宵は通夜をしよう。汝もまどろめ。太郎へ畏つてござる。大名へあら草や／＼。へ内陣の内ぞ床しきわが妻を、千代と契らん手枕の、袖をおおうてまどろみしが、程もあらせず夢さめて、太郎へヤイヤイ、お告げがあつた／＼。汝が妻になる者は、西の門の一の階にあろう程に、連れて帰れ、とお告げが。太郎へこれは如何な事、私のお告げもその通り。大名へ急いで参らう参らう。へ勇み悦ぶ足元に落ちたる竿を取り上げて、大名へヤ、これは如何な事、妻ではのうて、竹の先に糸がついてある、これは何であろうぞ。太郎へ不思議なお告げでござりますな。大名へイヤこれは悟つた。恵比須殿はふだん釣竿をはなさず、釣ばかりしてござるによつて、この針で妻を釣れということである。まず急いで釣りましょ。エイ／＼。へ釣ろよ／＼。神の教えの釣針を、おろし、みめよき妻を釣ろうよ。合へ針をおろせば、へ不思議やな、気高き女を釣りあげて、大名へアラありがたや、さてもよい妻がかかつてござる。嬉しや／＼。太郎へ何がさてお喜びでござる。大名へこれ／＼。そなたは定まる妻じやによつて、目をかけてやる程に夫を大事にしましようぞ。や小野の小町か楊貴妃か、アラ美しい／＼。太郎へイヤ申し／＼。道々こつそり楽しもうと、背中へ入れてきたこの吸筒、お二人様の三々九度、これにてめでとう御祝言。大名へヤこれは

一段の事じや。サアサア注げつけ。太郎へ心得てござる。大名へます女子の方よりさしませい。女へ申しわが夫、必ず見捨てて下さるな。
大名へなんの見すててよいものか。女へオオ嬉し。大名へ太郎冠者、祝して一つ謹うてくれ。太郎へ畏つて候。へ高砂や、この益が、へ二世の縁、神の御前で祝言は、三郎様がお仲人、よしそれとても浮氣心があるなら、ほんに罰が当るであるぞいな。必ず見捨てて下さるな、やいのやいのと寄り添えば、へかたえに聞きいる太郎冠者、気をもみあせり。
太郎へヤ申し／＼、その釣竿を私にお貸し下され、見事釣つて見せまし
よう。大名へ早う釣れ。太郎へイヤ釣る段ではござらぬ。エイ／＼。
へ釣ろよ／＼、釣るものは何々。鰯に鰯に東方棚に撞き鐘、信田の森の、
狐にあらぬ釣針を、さげておろして三十二相、揃うた十七八を、釣ろう
よ／＼、おかつさんを釣ろうよ。へ余念もながき鼻の下、オオ當るぞ當
るぞ。どっこいしめたと引き上ぐれば、かつぎ目深にかつぎし女。アラ
尊や、かかつたわ／＼、サアサアこちへござれ、嬉しや／＼。へサアサ
アこれからは三々九度の盃じや。これへござれ。何も恥かしい事はない。
そなたと夫婦になるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、
冬は雪見のちん／＼鴨、天にあらば比翼の鳥、地にまたあらば連理の枝、
必ずそもそもじは變るまいな。悪女へ何の變つてよいものかいな。太郎へま
ず何はともあれ御面相を。へかつぎをとればこはいかに、河豚に等しき
醜女ゆえ、太郎へヤア、和御寮は鬼か、ばけものか。のう消えてなくな
れ／＼。悪女へのうのうわが夫、今おつしやった樂しみは、嬉しゆうて
嬉しゆうて、わたしは忘れはせぬわいなア。太郎へヤレ情ない、ゆるし
てくれ。ゆるしてくれ。悪女へそりやつれないぞえ、太郎冠者どの。
へコレこちらを向かんせ。エエ何じやいなア。へ思えは深い恋の渦、沈む
わが身を釣糸に、へ結んだ縁の西の宮、ひる子儲けて二世三世、へ変ら
ぬ色は桟竹の、末葉榮ゆる女夫仲、離れはせじと取りすがる。大名へめ
でたいな。太郎へおめでとうござります。へ笑い興ぜし能舞台、鏡の松
の常磐津に、昔にかかる岸沢の、波の鼓のうちよりて、睦まじかりける
次第なり。

五、義太夫

天網島時雨炬燼

—紙屋内の段—

原作は近松門左衛門作の「心中天網島」で、享保五年（一七二〇）大阪竹本座で初演された。その後、何度も改作され、上演されたのを集大成したのがこの「天網島時雨炬燵」で、歌舞伎でも義太夫でもくり返し上演されている。

大阪天満お前町の紙屋治兵衛は、女房も子もありながら、曾根崎新地の紀の国屋小春と二年越しになじみ、親方から仲をせかれて、心中の約束をする。治兵衛の兄が侍姿になつて小春に逢い、心底をきくと、治兵衛と一緒に死ぬ気はないといふ。これを立ち聞いた治兵衛は、怒つて小春を刺そうとするが、兄にいさめられて小春と縁を切つて帰る。

ここからが今日演奏される場面になる。それから十日ほどたつた日のこと、治兵衛は恋がたきの太兵衛が小春を身請けするとき、面目がないと嘆いている。それをきいた治兵衛の女房さんはびっくりし、小春に治兵衛と別れてくれと頼んだことをうちあける。そして小春は太兵衛と添う気はあるまい、きっと死ぬにちがいないと心配する。そして身請けの金を作ろうと、衣類を質入れしよつとするところまで。

このあと、おさんは実家の父に連れ帰され、治兵衛は小春と網島の大長寺で心中する。妻子ある男と遊女の心中だが、この場面は治兵衛とおさんがよく描かれており、人情味あふれる作品となっている。

「すぐには仮なり。『門送りさえそこそこに』、治兵衛はそばにあり合わす、定木を枕うたた寝の、あたる炬燵の小春どき、まだ曾根崎を忘れずかと、のける蒲団の内さえも、涙にしめるその風情、おさんはあきれつくづくと、顔うちまもり打ちまもり、

紙書かぬがよござんす、なぜにお前はそのように、私が憎うござんすえ。
へああこれこれ、そりやまあ何をいやるわいの、子までなした二人が仲
に。へいええ憎いそな、にくいそな、憎ましやんすが暖かいなあ
一昨年の十月、中の亥の子に炬燵あけた祝儀とて、それここで、枕並べ
てこの方は、女房の懐には鬼が住むか蛇がすむか、それほど心残りなら
泣かしやんせ泣かしやんせ、その涙が蜆川へ流れたら、小春が汲んで呑
みやろぞ、あんまりむごい治兵衛さん、なんばお前にどのような、切な
い義理があるとても、二人の子供、お前なんともないかいな。へと、心
の限りくどき立て、恨み嘆くぞまことなる。

へおおもつともじや、あやまたた、悲しい涙は目より出で、無念の涙は
耳からなりとも出るならば、いわすと心見すべきに、同じ目よりこぼる
る涙、あしかけ三年がその間、露はどうも惜氣せぬそなにいうも恥かし
ながら、この間も曾根崎で、残らずきいた小春めが不心地、今という今
夢もさめ、思い切つてはいるけれど、これ、さつきにも話せし通り、あ
の太兵衛めが急に身請けをするとの噂、のいて十日もたたぬうち、請け
出さるる義理知らずの、畜生めが事は心残らねど、問屋中のつき合いに
も、金の工面に尽きしゆえ、小春をのいたのなんのとて、え知れぬ奴ら
が口の端に、かかるが無念な口惜しいとさ、思わず涙をこぼしたわいの
う。

へええ、そんならほんまに小春さんは、お前に愛想づかしをいつて、あ
の太兵が所へ行く筈かえ。へはてきよときよとしいその声わいの。へい
いえいなあ、そんなら小春さんは、生きている気じやないわいな、死な
しゃんすわいな、死なしゃんすわいな。へはてさて、なんば発明でも、
さすがは町の女房じや、あの不心中者がなんの死のうぞ。

へいえいえそうじやござんせぬ、小春さんに不心中はけしほどもないけ
れど、いつぞやよりお前のそぶり、何をいうてもうかうかと、もし悲し
い目を見ようかと、案じ過して小春さんへ、いとしいと思わんす治兵衛
殿のためじやほどに、思いきつて下さんせと、書き口説いてやつた文、
ひかれぬ義理と合点して、親にもかえぬ恋なれど、思いきるとの嬉しい
返事、これほど真実な心で、なんの太兵衛の所へ行かしやんしよ、請け
出されたらそのままに、死ぬる覚悟に違ひはない、小春さんを殺しては

六、清元北州千歳寿(北州)

はなしでも、みな夫への為じやもの、あとの間ではせんない事、さあさあ早う、へと三五郎呼び出し渡す風呂敷ふところへ、金おし入れて立ち出する。

元
北
州
千
歳
寿
(北
州)

へや、こりやこれ小判五十両、どうしてそなたが、へさあ、この金の出所も、あとで語れば知れること、この晦日に岩国の方、仕切り金に才覚はしたれども、それは兄御と相談して、商いの尾は見せぬわいな、小春さんの方は急なこと、それその小判五十両と、残りは私が、へと、かい立て、あけて取り出す染小袖、かねてかくとは白茶裏、黒羽二重も色変えぬ、浅紫の糸目結い、匹田鹿の子も惜しげのう、子供の物もかい集め内輪に見ても二十両、よもや貸さぬという事は、ないものまでもある顔に、夫の恥とわが義理を、一つに包む風呂敷の、内に情ぞこもりける。へ私や子供は何着いでも、とかく男は世間が大事、身請けしてあの太兵衛に、一分立てて下さんせ、へと、いえど答えも涙声、へおお過分ぞや嬉しいぞや、が、手付渡してとりとめ、請け出して囮うておくか、内へ入るにしてからが、ま、そなたは何と、へと、いいさしてうちしおるねば、へああ、なんのいなあ、必ず案じて下さんすなえ、はても、子供の乳母が飯焚きか、面倒ながら真実の、妹持つたと思うて、へと、いうも胸まで突っかける、涙呑み込みのみこみて、夫に立てる貞節は、はたで見る目もいじらしき。

へええ何にもいわぬ、これ女房ども、親の罰天の罰、仏神の罰は当らずとも、女房の罰が恐ろしい、許して給も、へとばかりにて、伏し拵む手を、へああこれもつたないわいな、もつたないわいな、手足の爪を見

ば千鳥足、^ヘ日本堤を土手馬の、^ヘ千里も一里通い来る、浅草市の戻りには、吉原女郎衆が手鞠つく、^ヘちょと百ついた浅草寺、筑波の山のこのもかの、葉山茂山おしげりの、繁き御蔭に栄え行く、四季折々の風景は、^ヘげに仙境もかくやらん。

隅田の流れ清元の、寿延ぶる太夫殿、君は千代ませ千代ませと、悦びを祝う天権和合神、日々に太平の足をすする芦原の、国安國と、^ヘ舞い納む。

七、長唄教草吉原雀(吉原雀)

初世桜田治助作詞、富士田吉治、杵屋作十郎作曲。明和五年(一七六八)十一月江戸市村座で初演された。顔見世狂言の大所作事だったで、八幡太郎義家の危難を、鷹の精が助けるという筋がからんでいた。しかし今日ではそれらの筋をはなれて、鳥壳りの踊りあるいはそれに鳥刺しが加わった踊りとしてよく上演される。

しかし曲そのものも名曲で、本調子から二上り、本調子、三下り、二上り、三下りと、調子がえも巧みに配列されて変化があり、節付けの巧みさは長唄曲中でも第一級である。三味線もまた技巧を發揮し、二百年以上もむかしに作られたことが信じられぬほどである。

「きぬた」というのは「きぬいた」の略で、板の上に衣を置き、これを叩いてやわらかくしたり、滑らかにしたりすることです。その材料や形は時代とともに変りましたが、これを打つときの単調な音とテンポが、いかにもわびしい秋の風情なので、月や虫の音などとともに、秋の題材としてよくとり上げられています。それでこのほかにも、多くの「砧もの」が作られています。

この「岡康砧」は、山田流筝曲としては一風変わったもので、多分に手事風のところがあり、器楽性の勝つている曲です。もとこの曲は、山田流でむかし弾かれていたのですが、まったくすたれていたのを、明治二十年ころ山室保嘉と三世山勢松韻が世に出したものといわれています。

原曲は岡安小三郎作曲となっていますが、徳川家康が駿府藩在中にこれをきいて感動し、自分の康の字に変えるように

八、筝曲岡おか康砧

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。
した。何かと不行届の点もありましたでしあうが、お許しを願いまして、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願ひ申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変らぬ御支援をいただけますようにお願い申し上げます。

来年も三月八日(日)に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がきまりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おとこ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございました。

（手事）^ヘ月の前の砧は、夜寒を告ぐる、^ヘ雲井の雁は、琴柱にうつして面白や。
（手事）^ヘ夜半の砧の時雨の雨と。うち連れ立ちて、今日の遊びは。

られて、沖の鷗の、二挺立ち、三挺立ち、素見ぞめきは椋鳥の、群れつきつき格子先、叩くいの口まめ鳥に、孔雀ぞめきて目白押し、見世すががきのてんてつとん、さつさ押せおせ。

大津投節^ヘ駒れし扇の袖の香に、見ぬようで見るようで、客は扇の垣根より、初心可愛く前渡り、さあ来た、また来たさわりじやないか、またおさわりか、お腰の物も合点か、それ編笠もそこに置け。二階座敷は右か左か、奥座敷でござりやす、はや益持つてきた、とこへ静かにお出でなさんしたかえ、という声にぞつとした、しんぞ貴様は寝てもさめても忘られぬ、笑止氣の毒またかけさんす、何な、かけるもんだえ。

三下り^ヘそうちした黄菊と白菊の、同じ勤めのその中に、外の客衆は捨舟、流れもあえぬ紅葉ばの、目立つ芙蓉の分け隔て、ただ撫子と神かけ、いつか廓をはなれて紫苑、そうした心の鬼百合と、思えば思うと気も石竹になるわいなあ、末は姫百合男郎花、その樂しみも薄紅葉、さりとはつれない胴欲と、垣根にまとう朝顔の、はなれ難なき風情なり。

東雲かごとが過ぎし口舌の仲直り、^ヘひとたきくゆる仲人の、その継ぎ木こそ縁のはし、そつちのしようが憎いゆえ、隣座敷の三味線に、合わせ悪洒落まさなごと。(中略)

二上り^ヘ君の寝姿窓からみれば、牡丹芍薬百合の花、しょんがいな、芍薬ほいほい、芍薬牡丹牡丹芍薬百合の花、しょんがいな、つけざしは濃茶かえ、^ヘええ腹が立つやら、

三下り^ヘ憎いやら、どうしよう、こうしよう、憎む鳥鐘、曉の明星が、西へちろり、東へちろり、ちろりちろりとするときは、(中略)

へ文の便りになあ、今宵ごんそとその喚、いつの紋日も主さんの、野暮なことじやが比翼紋、離れぬ仲じやと、しょんがえ、染まるえにしの面白や。

げに花ならば初桜、月ならば十三夜、いづれ劣らぬ粹同士の、あなたへいいぬけ、こなたのだて、いすれ丸かれ候かしく。

本調子^ヘ駒れし扇の袖の香に、見ぬようで見るようで、客は扇の垣根より、初心可愛く前渡り、さあ来た、また来たさわりじやないか、またおさわりか、お腰の物も合点か、それ編笠もそこに置け。二階座敷は右か左か、奥座敷でござりやす、はや益持つてきた、とこへ静かにお出でなさんしたかえ、という声にぞつとした、しんぞ貴様は寝てもさめても忘られぬ、笑止氣の毒またかけさんす、何な、かけるもんだえ。

三下り^ヘそうちした黄菊と白菊の、同じ勤めのその中に、外の客衆は捨舟、流れもあえぬ紅葉ばの、目立つ芙蓉の分け隔て、ただ撫子と神かけ、いつか廓をはなれて紫苑、そうした心の鬼百合と、思えば思うと気も石竹になるわいなあ、末は姫百合男郎花、その樂しみも薄紅葉、さりとはつれない胴欲と、垣根にまとう朝顔の、はなれ難なき風情なり。

東雲かごとが過ぎし口舌の仲直り、^ヘひとたきくゆる仲人の、その継ぎ木こそ縁のはし、そつちのしようが憎いゆえ、隣座敷の三味線に、合わせ悪洒落まさなごと。(中略)

二上り^ヘ君の寝姿窓からみれば、牡丹芍薬百合の花、しょんがいな、芍薬ほいほい、芍薬牡丹牡丹芍薬百合の花、しょんがいな、つけざしは濃茶かえ、^ヘええ腹が立つやら、

三下り^ヘ憎いやら、どうしよう、こうしよう、憎む鳥鐘、曉の明星が、西へちろり、東へちろり、ちろりちろりとするときは、(中略)

へ文の便りになあ、今宵ごんそとその喚、いつの紋日も主さんの、野暮なことじやが比翼紋、離れぬ仲じやと、しょんがえ、染まるえにしの面白や。

げに花ならば初桜、月ならば十三夜、いづれ劣らぬ粹同士の、あなたへいいぬけ、こなたのだて、いすれ丸かれ候かしく。

一、筝曲竹生島

ちく

ぶ

しま

千代田検校（？—一八六二）の作曲。千代田検校は、はじめ山田流々祖の山田検校に学び、のち初代山登検校の門に入つた人。

この曲は能の「竹生島」を脚色したもので、醍醐帝に仕える臣下が、近江の竹生島に参詣しようとして、琵琶湖のほとりに着くと、漁翁と若い女が釣舟に乗ってきたので、それに乗せてもらい、岸辺ののどかな春景色をながめているうちに、竹生島に着いた。朝臣は翁の案内で参拝したが、つれの女が社前にきたので、この島は女人禁制のはずであると不審がる。翁は、この島の神は四十八願の一つに女人往生を誓われた阿弥陀如来の御再来であるから、女人こそ参るべきであると答え、若い女は、この島の弁財天は女体であるから、わけへだてはしないといい、自分は人間ではないといつて社殿に入り、翁も湖の主であるといつて波の中に入ってしまった。

やがて御殿が鳴動し、弁財天が輝く姿をあらわして舞を舞い、また波風が鳴り動いて竜神が湖の上に出現し、朝臣に金銀珠玉をささげて竜神の舞を舞つた。

一中節の要素が強く見られる曲だが、さまざまな手法を用いて、竹生島詣でをはなやかにうたつた歌ものです。

（頃は弥生の半ばなれば、浪もうらに海の面、霞みわたれる朝ぼらけ、静かに通う船の道、げに面白き時とかや。）いかにあれなる船に便船申

一一、宮蘭鳥辺山

とり

やま

（うのう、（おお、召され候え。（嬉しやさては迎えの船、法の力とおぼえたり、（今日はことさらのどかにて、心にかかる風もなし。
（山々の春なれや、花はざながら白雪の、降るか残るか時しらぬ、峯は都の富士なれや、なお冴え返る春の日に、比良の峰おろし吹くとも、
（うけ給わり及びたるよりも、いやまさりてありがたし、不思議なこの島は、女人禁制とうけ給わりてありしが、あれなる女人は何とて参られ候ぞ。）それは知らぬ人の申す事なり。かたじけなくもこの島は、九成如來の御再誕なれば、まことに女人こそ参るべきであるから、
（もなきものを。）弁財天は女体にて、その神徳もあらたなる、天女と現じおわしませば、女人とて隔てなし、ただ知らぬ人の言葉なり。）げにかほど疑いも、あら磯島の松かけを、便りに寄する海士小舟、（わ）れは人間にあらずとて、社壇の扉を押し開き、御殿に入らせ給いければ、（（翁も水中に入るかと見えしが、白波のたちかえり、われはこの海のあるじぞといい捨てて、またも波間に入り給う。
（（不思議や虚空に音楽きこえ、花降り下る春の夜の、（樂）（月に輝く少女の袂、かえすがえすも面白や、（夜遊の舞楽もやや時過ぎて、月澄みわたる海面に、浪風しきりに鳴動して、下界の龍神あらわれ出、光も輝く金銀珠玉を、かのまれびとに捧ぐるけしき、ありがたかりける奇特かな。）
（（宮蘭節は、もと上方に生れ、幕末ごろから江戸に定着した淨瑠璃。江戸では、むしろ蘭八節というい方で知られており、獨得な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小

説「雨瀧々」にも描かれている。

京都市郊外、東山の中腹付近の鳥辺山または鳥辺野というあたりは、男女の心中道行にふさわしい場所として有名だった。

それでこの鳥辺山を舞台にした事件は、古くはおまん源五

兵衛、お染半九節などで知られていたが、明和四年（一七六七）ごろ、宮蘭節に作曲され、集成された。

この曲は、宮蘭節の代表曲で、幽玄な中にも妖しいばかりのなまめかしさを漂わせている。

なお、お芝居でよく上演される「鳥辺山心中」は、大正四年に岡本綺堂がこれらの実説やいつたえをもとに創作したものである。

一二、義太夫伽羅先代萩

めい ほく せん だい はぎ

—政岡忠義の段—

必ずかならず若氣を出し、短気な心持ちやんやと、重ね井筒の上越し、粹な意見も上の空、お前に迷う心から、面白い氣で聞いていた、親御様へも世の義理も、わしから起るこのしたら、堪忍してとばかりにすがり付いて泣きいたる。

（（上りへ思い切らしやられ、もう泣かしやんな、わしは泣かねどソレこんなさんの、いいやそなたの、いやこななのと、顔と顔を見合させて、一度にわっと嘆くにぞ、一足ずつに消えて行く、終にこの野の春降る雪や、折からにはや寺々の鐘も撞きやみ、夜はしらじらと、鳥辺山にぞ着きにけ。

（（一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の声、はや初夜もすぎ、四つも告げ、九つ心も、恋路の闇にくれば鳥、あやなき空や、浮橋に、つながる縁や縫之助、つい仇惚れも誠となりて、ほんの女夫になりたいと思う思いはままならぬ、今はこの身に愛想もこそも、
（（上りへ尽きた浮世や、いざ鳥辺野の、女肌には白無垢や、上に紫藤の紋、中着緋紗綾に黒繻子の帯、年は十七初花の、雨にこがる立ち姿、男も肌は白小袖にて、黒き綿子に色浅黄裏、二十一期の色盛りをば、恋といいう字に身を捨小舟、どこへ取りつく、島とても無し。
（（本調子へきく度々につらかりし、父母の事思い出し、あと嘆きを思いやり、ここから去んで吳竹の伏し沈みたる袖の露、浮橋涙もろともに、思えばこそ、好かぬ勤めの辛抱も、好いた殿御へ心意氣、いとし可愛が定ならば、五度逢うものを三度逢い、二度を一度の遅瀬には、親おやかたの機嫌もよく、色で身をうつることもなく、世間に多い心中も、金と不孝で名を流す、色で死ぬるは無いぞとよ。恋は思ひのはじめにて、盛りが憎い迎い驚寵。そのきぬぎぬや朝顔の、夕顔にまでわけへだて、辛氣な苦界ままならぬ、悲しいことや辛いこと、生きる死ぬるの手詰にも、

（（ふつう、義太夫節に作られたものを歌舞伎に移す場合が多いが、この題材は、歌舞伎の方がさきに脚色・上演している。題材は万治・寛文（一六五八—七二）ごろの仙台の伊達騒動で、歌舞伎は奈河亀輔作、安永六年（一七七七）四月大阪中の芝居で初演された。
（（義太夫は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸らの合作で、天明五年（一七八五）一月、江戸結城座で初演された。歌舞伎でも義太夫でも、俗に「飯焚き」といわれる御殿の場が、幼君鶴喜代を保護している政岡の苦労を中心としているので、よく上演される。

（（栄御前が頼朝公からの見舞といって、毒入りの菓子を持つてくる。それを政岡の子の千松が取つて食べ、菓子折を蹴散らす。八汐は毒をさとられぬようと、千松を刺し殺す。しかし政岡は顔色つかえないので、栄御前は若君と己が子と

を取り替えたのだと思い込み、政岡に陰謀のことをうちあけお通し申せ、コレ千松、そなたは次へ、コレ常々母がいいしこと、必ずかならず忘れまいぞ、サア早う早う、へと追いやつて、衣紋つくろうそうちに、沖の井八汐も出迎い敬まう。

へ梶原様の奥方お入り、へハテ心得ぬ、梶原の奥方とは、なににもせよ、お通し申せ、コレ千松、そなたは次へ、コレ常々母がいいしこと、必ずかならず忘れまいぞ、サア早う早う、へと追いやつて、衣紋つくろうそうちに、沖の井八汐も出迎い敬まう。

へ押出し開かせ梶原平三景時の奥方、夫の権威に榮御前、しとしとと座に直り、へオオどれどれ出迎い大儀、自ら今日来たりしは右大将の御上使、夫景時、うけたまわれども、義綱の一子鶴喜代病氣によつて男たる者を禁じたると聞きしゆえ、夫に代るこの榮、義綱隠居のその後、鶴喜代の所劳、ことに食事もすすまぬ由、御心をつけられしこの御菓子、頼朝公より下され物、ありがたく頂戴あれ、

へと持たせし菓子箱、差し出だせば、へ八汐、うけとり、へこれはこれはありがたい、大将よりの下され物、サアサア申し若君様、早う頂戴遊ばしませ、へと蓋押し開き、へてもまあ見事、結構なこのお菓子、いざ召しませ、へと差し出だす。へさすが童の嬉し気に、立ち寄り給う鶴喜代君。

へアア申し御前様、またそのようなさもしいこと、御病氣の御身なればお毒になつたらんとなさるる、こつちへお越し、へと政岡が詞、へ打ち消す榮御前、へヤア頼朝公より下さるるお菓子、なに疑うて頂戴させぬ、ぜひこの榮が食べさせる、へアイヤそれでも、へムムまだし頼朝公の仰せは背いても苦しゅうないか、へさあそれは、へサア、へサア、へサア、へサアサアサア、へと権柄押し。

へ奥より走つて千松が、へその菓子欲しい、へと引つ掴み、なんの頃是もただ一口、へ八汐がびっくり、へ榮御前、毒の企みのあらわれ口、

へたちまち惱乱、目を見詰め、蹴散らかしたる折は散乱、八汐はすかさず千松が、首筋片手に引き寄せて、懷剣ぐつと突つ込めば、へわつと一聲七転八倒、へおどろく沖の井、へ政岡が仰天ながら一大事と若君抱き、

わが部屋へ押しやり参らせ、戸口に付き添い守りいる。

へ後には一人政岡が、奥口うかがい窺いて、わが子の死骸抱き上げ、こらえこらえし悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入りせき上げ嘆きしが、へこれ千松、よう死んでくれた、でかしたな、でかしたな／＼、でかしたな、そなたが命捨てたゆえ、邪智深い榮御前、取り替え子と思いつがえ、己が企みを打ち明けしは、親子の者が忠心を、神や仏もあわれみて、鶴喜代君の御武運を守らせ給うか、ハハハハありがたや、ありがたや、ありがたや、ありがたや、ありがたや、これというのもこの母が、常々教えておいたこと、幼な心にききわけて、手詰になつた毒害を、よう試みてたもつたのう、よう試みてたもつたのう、そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の贋を固めます、まことに國の礎ぞや。

へとはいひものの可愛やなあ、君の御かねてより、覚悟は極めていながらも、せめて人らしい者の手にかかるても死ぬことか、素性殘しい銀兵衛が女房ずれの刃にかかり、なぶり殺しを現在に、傍に見ている母が氣は、どのようにあるう、マどうあるう、思い廻せばこのほどから唄う

台を想像すると色彩が豊かですし、二階からきこえてくる唄は「昨日の花は今日の夢……」で、これはめりやす「いもせ川」の一部です。「壇浦兜軍記」の阿古屋琴責をうたつもので、當時流行っていたのでしよう。余所事に使つて立体的な効果をおげています。

禿みどりのあどけないセリフのあと浦里のクドキは、新内節特有のウレイカカリで、さきどころとなつていています。なお時間の都合で、山名屋の亭主が入つたところから演奏いたします。

へきびしけれ、へ浦里あとをうち眺め、涙にくれていたりしが、浦里へええ、お情あるお言葉なれど、こればかりはどうも忘られぬ、お許しなされて下さんせ、まだこの上にどのよのな、悲しい苦しい責め苦でも、私やいとやせぬどうなつても、思いきられぬ、いつそ添われぬものならば、一緒に死にたい時次郎さん、殺して下んせ、死にたいわいのう。

へ昨日の花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理という字は是非もなや、勤める身のままならず。

初代鶴賀若狭掾直伝で「蘭蝶」「伊太八」とともに新内節の代表曲とされています。

明和六年（一七六九）七月三日、伊之助三芳野の心中事件がありました。男は浅草蔵前に住む幕府の御用商人伊藤伊左衛門の養子で二十一歳、女は新吉原京町二丁目の萬屋の遊女で二十四歳だったとのことです。二人は前の年からなじみを重ねた結果、金につまつて男は勘当、女は他の客を断るというで、借金はふえるばかり。二人はしめし合せて廓を抜け出し、三河島田甫のあたりで心中という結果となりました。この事件をとりあげて脚色したのが初代鶴賀若狭掾で、ユース性の強い作品でしたが、名曲なので今日まで語りつがれてきています。上下にわかれ、上は浦里部屋、下がこの雪責となっています。

黒堀、古木の松、降る雪、そして赤い色の女の衣裳と、舞

四、新内明鳥夢泡雪（明鳥）

— 雪責の段 —

た唄に、へ千松が七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年までもまだ見えぬ、へと唄の中なる千松は、待つ甲斐あつて父母に、顔をば見することもあるう、同じ名のつく千松の、そなたは百年待つたとて、なんの便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた、親の心はみな一つ、子の可愛さに毒なもの、食べなというて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいといいうような、胴欲非道な母親が、またと一人あるものか、武士の胤に生れたは、果報か因果かいじらしや、死ぬるを忠義といふことは、いつの世からの習わしそ、へと凝り固まりし鉄石心、さすがに女の恩に返り、人目なけば伏し転び、死骸にひしと抱きつき、前後不覚に嘆きしは、ことわりすぎて道理なり。

逢いたい見たいとしゃくりあげ、狂氣の如く心も乱れ、涙の雨に雪解けて、前後正体なかりけり。

「男はかねて用意の一腰、口にくわえて身をかため、忍び忍びて屋根伝い。それと見るより悲しさの、伝えたわむ松ヶ枝も、今宵一夜のかけ橋と足もそろに定めなき、（中略）なんなく下へ降り立つて、二人が繩を切りほどき、

時次郎へこれ浦里、ここで死ぬるもやすけれど、のがれるだけは落ちてもみん、ついこの埠を越すばかり、さいわいこれなる松の枝、伝えて行かんもろとも、互いに手早く身ごしらえ、みどりもともにと取りする。

浦里へ可愛いやこの子は何とせん。

時次郎へおお心得たり、トみどりを小脇にひつ抱え、かいがいしくも時次郎、松の小枝を浦里に、しつかと持たせあたりを見廻し、忍び返しをひつぱずし、梯子となしてさしあるし、ようよう三人埠の上、降りると思えど女の身、浦里は胸を据え、死ぬると覚悟をわめし身上、何かいわんさあ一緒に、手をとり組んで一足飛び、げにもつともとうなづきて、互いに目を閉じ一思い、ひらりと飛ぶかと見し夢は、さめてあとなき明鳥、後の噂や残るらん。

五、常磐津 乗合船 恵方万歳（乗合船）

初春の隅田川の渡し場に落ち合った市井の諸人の芸尽しといふ趣向です。賑やかな置のあと、万歳と才蔵が登場、通人、大工、芸者などが出て来て、白酒屋のいい立て、大工の道具尽し、通人の愉快な話、万歳と才蔵の柱立など、江戸末期の風俗描写が展開します。

三世桜田治助作詞、五世岸沢式佐作曲で、天保十四年（一

大工へええ仕方がねえ、そんなら大工道具になぞらえて、惚け話をやつつけべい。へそも、
へ番匠の始まりは、たたき大工のこちとらが、聞いてもらわの空仕事、嘘を突きのみ差し曲尺を、使い馴れたる友達と、へすぐに裏釘返して後は、ほんに辛気な溝鉋、へ互いに二世と墨さして、誓文くさび離れぬ仲を、にくや節木の性悪さ。へさあさあこれからは宗匠先生、玉句をうけたまわりとうござる。（発句とやらばつくとやら、早く聞きてえねえ、さあさあ、早く早くはやく。）

宗匠へああさな宣いそ。諸事風雅の狂道は、士農工商のなりわいまでも、うがたねばならぬて。ええ凝つては思案に能わずと申せば、おののく騒がせ給うなさわがせ給うな。ええ、こおつと、春風、ええ春風や、春風や、黒い羽織に小脇差さして、ゆらりゆらりと船場へおりやる。へえいやはなはだ醜陋、時に景色は未明の事に限りやすね、白昼は埃まんまとして野暮ものたっぷ、これ恐るべだね。へあとを慕うてなまめく声に、さあさやつとや、（中略）

へ先月の月末か、今月の月初めか、木へ行きの菜飯の田楽で、朝飯とこてえやした。すると未明だから、豆腐が一夜水中に御逗留、や真平と答えてとろんとけし、棹ちようものにておい、へはや直中へ出でにする。へこいねがわくば船衆急ぐべだよ。へこちらも急ぐ送り船、ほどなく着岸、へさあ一つきこし召せ、ところを重ねて、へ薰りつん花に風、軽く来て吹け酒の泡、へはははは、あはははは、笑いこうじて腹立てて、ええええ、筋をいうべや泣上戸、

女へさあさあ太夫さん、これからお前の番じや、お前の番じや。

万歳へこれはまた迷惑、才蔵仕方がないわ、まず初春のことじやから、おめでとうことぶきを、さらばお祝い申そうと、

へ鼓おつとり声づくるい、へやんりやめでたやなあ、鶴は千年の名鳥なり、亀は万年のよ御寿命保つ、鶴にもまされ龜にもます、今日このお家をば、長者のしんと、へ祝い榮えましまます。（建初の柱をばよ、綾と錦で包まして、へ弓と矢をばつけんさせて、これは火防の柱とて、へ鬼門を守らせ候えば、へ一本の柱が一の宮よ、二本の柱がにせんだか、三本の柱が神の明神、四本の柱がしろくや天のう、五本の柱が牛頭天王、

（中略）千本あまりの柱をんはや、おつとり建てようこばれたり（中略）
へまことにめでとう、へ候いけるとは、これからそろそろ万歳、へおや
万歳、へえ万歳、へおや万歳、え万歳、万歳々々、万歳々々、万歳樂で
およろこびだ、ははははは。へさんどなさんどな、三度鶴が舞いにて、
へあだな舞いに候わす、へむかしまだ後白川の法皇さまの御時に、へこ
れわい、へ熊野山へ御案内の折からに、へこれわい、へ諸太夫の装束で、
へ左折りの鳥帽子にて、へこれわい、へその時京都まで上りては、これ
大内の御門かや。へこれわい、へお江戸さあへ下りては、これ將軍さま
の御門かや、へこれわい、旦那さんの御門と三幅は一対にて、へこれわ
い、へ元日にいさぎよく開かあやれ、きりりや、きりりや、
へまたもとりてはめでたい者が参る。へなにが何が参る。へおよろこび
の大判や小判が、へこれわい、へ佐渡で湧いた金かや、へお江戸で出来
た金かや、へ旦那さんへ湧くはやれ、ざくざくにやあざくら、へおやざ
くら、へえざくら、へおやざくら、えざくら、ざづくらざつと湧いてき
た、ははははは。へ太夫さんあらけねえ、へこれ錢や金の湧きよだに。
へこれわい、へこれさまの御座敷に、つかみどりが始まる。（子供らも
油断するな。へもつと持つたらしくひこめ。へ升を持つたらはかり込め。へ美しい姉さん
にやあ、才蔵なんぞは内証づくなら、五両や三両はさつくれへいに。
へこれわい、へそこらの姉さまの、ほうほうの回り、お鼻の回り、おで
でらてんの出でその近所の、へへへへ、べつちやらこ、へまつちやら
こ、へべつちやらこ、へまつちやらこ、へよほいやれ、ほほやれ、ま
んしやらこに、まんざらこ、へまんざら野暮では、どうした才蔵、あり
やせまい。（代代栄えて、へごまんの長者よ、なお万歳樂までもやら、
へえおめでとう。（中略）
へともに嬉しき乗合に、声春雨と鳴りひびく、初雷に人々は、わが家を
さして急ぎ行く。

八四三）正月、江戸市村座の春狂言に初演されました。初演のときは、「魁香樹いせ物語」という題で、常磐津・富本・竹本・長唄の地でしたが、慶応ごろに常磐津に編曲され、題名も今日の「乗合船」に改められました。そしてさらに明治二十九年正月に東京春木座で、市川猿之助、中村勘五郎らが復活上演してから、大流行するようになりました。

六、尺八鹿の遠音

琴古流本曲三十六曲のうち、修禪を旨として特に重んじられる「古伝三曲（真虚靈・霧海庵鈴慕・虛空鈴慕）」に対し、宗教性の少ない芸術的な曲として、この「鹿の遠音」は「鶴の巣籠」とともによく知られています。

紅葉の頃、雌鹿を慕つて啼く雄鹿のなき声を描写したものといわれ、秋の深山の情景を彷彿させる趣があります。古来から二管による「掛け合い」で演奏されることが多いのです。が、必ずしも雌雄二匹と限らず、複数の雄鹿が雌鹿を慕つてこもごも啼くありますという解釈もあり、三管またはそれ以上で演奏されることもあります。

冒頭の旋律は、深山の静けさを思わせるこの曲独特のものですが、そのあとにきかれる「ムライキ」奏法は、息を強く吹きこんで出すもので、三曲合奏ではきかれないものです。ふたたびムライキがきかれたのち、短いフレーズの掛け合いがありますが、ここが雌雄の鹿が呼び合う情景をあらわしているといわれるところです。

初めテンポを遅くとり、次第に速くして三管がからみ合うよう進み、再度テンポを落します。そして冒頭の雰囲気にもどるかのように、曲は静かに閉じて行きます。

七、清元メ能色相図（神田祭）

三升屋二三治作詞、二世清元斎兵衛作曲。天保十年（一八三九）九月、江戸河原崎座で二世清元延寿太夫の養子二世栄

寿太夫のお目見得淨りとして初演された。

神田明神の祭礼は、江戸時代のはじめ将軍の上覧に供して行うようになり、大祭のない年は陰祭といった。江戸時代は九月十五日だったが、明治以後五月十五日に変更された。歌詞は支離滅裂だが、いかにも神田の祭礼氣分をしのばせる粹な味と、景氣のいい節がついているので流行している。

八、長唄勧進帳

八、長唄勧進帳

しめろやれ いろのかけ こえ

この曲は「越後獅子」などとともに、長唄の代表曲としてよく知られている。元来、舞踊劇の地（伴奏）として作られたので、歌詞だけをきいていたのでは、意の通じないところがある。それにもかかわらずもてはやされているのは、劇としての「勧進帳」が、歌舞伎として知られていること、また音楽としても、多くの他流の特色をとり入れながらもすっかり長唄化され、演奏しやすいことも原因としてあげられよう。いずれにしても、長唄の美点を集成したといつてもいいほどの名曲で、よく演奏される。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎（のちの六翁）が、一世一代としてその技倅をふるつたもので、作曲に三ヶ月を費したと伝えられている。それも、はじめは金曲二上り調の説経節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の中調子となつたと伝えられている。

なお、初演のときの「勧進帳」は、いわゆる松羽目物の先駆作品であり、また、演奏にあたつては立別れの形式をはじめたことも、特色として知られている。

旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしむるらん。時しも頃は如月の、きさらぎの十日の夜、八月の都を立ち出でて、へこれやこの、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山かくす、霞ぞ春はゆかしきる。波路はるかに行く舟の、海津の浦に着きにけり。へいざ通らんと旅衣、闇のこなたに立ちかかる。へそれ山伏といひば、役の優婆塞の行義をうけ、即身即仏の本体を、ここにてうちとめ給わんこと、明王の照覧計り難う、熊野權現の御罰當らんこと、立どころにおいて疑いあるべからず、唵阿毘羅吽欠と、珠数さらさらとおし揉んだり。へもとより勧進帳のあらばこそ、笈の内より往来の、巻物一巻取り出だし、勧進帳と名付けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。へ士卒がはこぶ広台

へ秦の始皇の阿房宮、その全盛にあらねども、粹な心も三浦屋の、茶屋は上総屋両介と、氣軒も菊の籠さえ、山谷風流のあらましを、松の位の品定め、へ一歳を、今日ぞ祭りに当り年、警護でこまえ花やかに、飾る機敷の毛氈も、色に出にけり酒機嫌、神田雛子も勢いよく、來ても見よかし花の江戸、祭に対する派手模様、牡丹、錦菊、裏菊の、由縁もちようど花尽し、祭のナア、派手な若い衆が勇みにいさみ、身姿を揃えてヤレ離せ、ソレ離せ、花山車でこまえ、警護に行列ヨンヤサ、男達じやのヤレコラサ、達引じやのと、いうちや私に困らせる、へ色の慾ならこっちでも、へ常から主の仇な氣を、知つていながら女房に、なつてみたの慾が出て、カンヘ神や仏を頼まずに、義理も糸瓜の皮羽織、親分さんのお世話にて、わたりをつけこれからは、世間がまわす人さんの、前はばかりづ引き寄せて、楽しむうちにまたほかへ、それから闇と口癖に、へ森の小鳥われはまた、尾羽をからすの羽根さえも、なぞとあいつが得手物の、ここが木遣の家の株。

へヤアやんれ引け引けよう声かけて、エンヤラサ、やつと抱き締め、床の中から、小夜着布団をなぐりかけ、何でもこつちを向かしやんせ、よむるは、一期の浮沈ここなりと、おのの後へ立ちかかる。へ金剛杖をおつ取つて、さんざんに打撃する。へ通れとこそはののしりぬ。へかたがおつるまい、臆病のいたりかと、みな山伏は、打刀抜きを抜き、勇みかかるれるありさまは、いかなる天魔鬼神も、恐れつべう見えにける。へついには泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。

へ判官御手を取り給い、へ鎧に添いし袖枕、かたしく隙も波の上、あるときは舟に浮かび、風波に身をまかせ、またある時は山背の、馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しあり夕浪の、立ち来る音や須磨明石、とかく三年の程もなく痛わしやと、しづれかかりし鬼あざみ、霜に露置くばかりなり。へ互に袖を引き連れて、いざさせ給えの折柄に、へげにげにこれも心得たり、人の情の益を、受けて心をとどむとかや。へ今は昔の語り草、へあら恥かしの我が心、一度まみえし女さえ、へ迷いの道の関越えて、今までここに越えかねるへ人の闇のやるせなや、へああ悟らぬこそ浮世なれ。へ面白や山水に、おもしろや山水に、盃を浮かべては、流に引かるる曲水の、手まずさえぎる袖ふれて、いざや舞を舞おうよ。へもとより弁慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。へこれなる山水の、落ちて巣にひびくこそ、鳴るは滝の水、へ鳴るは滝の水。へ鳴るは許すな閑守の人々、暇申してさらばよとて、笈をおつとり肩にうちかけ、へ虎の尾を踏み毒蛇の口を、のがれたる心地して、陸奥の国へぞ下りける。